

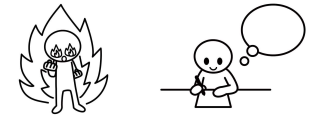
第5章 言語と心理

(1) 第二言語学習に影響する学習者の要因

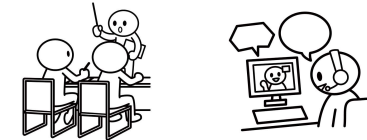


1

内的要因 : 動機付け、性格、不安、年齢、**言語適性**、**認知スタイル** (学習スタイル) など



外的要因 : **学習環境**、**学習時間**など



2

<動機づけ> byガードナーとランバート(1972)

⇒ 第二言語が話されている国の文化を積極的に受け入れ、**その国の社会に参加したい**と望んだり、**その国の人々を理解したい**といった動機づけ

⇒ **社会的地位、就職など目的を達成するための道具(手段)**とする
例) 日本の会社に就職するためにJLPT N2取得が必要

3

<動機づけ> byデシ(1985)

⇒ 学習そのものが楽しい、おもしろい、といった**内面から出る動機づけ**

⇒ 報酬、評価、など**外部から来る動機づけ**

例) JLPT N1を取得したら、会社から報酬がもらえる

4

<性格、不安>

自分に対する自信、**リスク・テイキング**、外向的か内向的か



<不安を感じている学生への対応>

: 日記を通して、気持ちや考えを伝え合う

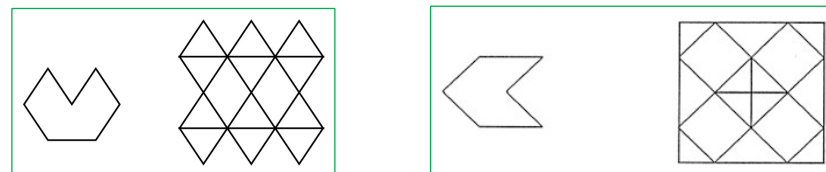
6

<認知スタイル>

物事を するときの個人のスタイル

※学習に関して述べる時（学習者が好む学習方法）は、「
」という用語を使うことがある

埋没図形テスト



8

図形をすぐに見つけられた

: 周囲の環境に惑わされない
細部を全体から切り離して把握することが得意
に優れていて、**の成績がいい**

なかなか図形を見つけられなかった

: 周囲の環境に影響されやすい
物事を**全体的**に捉える傾向にある。
に優れていて、**に積極的に参加**

9

<言語適性>

をどの程度持っているか

代表的なテスト
Modern Language Attitude Test

- ①
⇒新しい音声を識別したり記憶できる能力
- ②
⇒文中における語の文法的な働きを認識する能力

10

<言語適性>

③

⇒文法規則などを帰納的に推測できる能力

④

[MLAT Sample Items](#)

11

by Psicología y Mente

リー・クロンバック (1916 -2001)
アメリカの教育心理学者

(1957)

どんな

が効果的かは、

学習者の

(=言語適性、性格、認知スタイル、能力など)

によって異なる

12

(2) 学習者のストラテジー



14

コミュニケーションで問題が起きたときに学習者が使う方法
(何とかして伝えよう、何とか相手に理解してもらおう)

①

・自信がない語や文法の使用を避ける

・話したい内容の語がわからないとき、その話をするのをあきらめる



16

3

②

適切な語がわからないとき、

- ・ 他の語で**言い換える**
- ・ 知っている語を組み合わせて自分で**ことばを作り出す**
- ・ その語の**説明**をする



17

③

母語の言い方を**直訳**したり、**母語をそのまま使う**

④

相手に助けを求める

例：「もう一回言ってください。」
「〇〇は〇〇語で何ですか？」

⑤



18

by レベッカ・オックスフォード

- ・ **：**目標言語に直接かかわるもの
①**記憶** ②**認知** ③**補償**
- ・ **：**目標言語に直接には関わらないもの
①**メタ認知** ②**情意** ③**社会的**

20

直接ストラテジー

①

：記憶するための工夫

例) ・

- ・ **単語カード**の使用
- ・ 繰り返し復習
- ・ 動作をしながら覚える
- ・

(覚えたい語と音が似ている母語の言葉を関連付ける)

22

直接ストラテジー

② :情報を整理して、理解を促すための工夫

- 例) ・
- ・ 重要な箇所に
 - ・ 母語に訳す
 - ・ 母語と比較する
 - ・
 - ・



= おおまかな内容をつかむ

= 欲しい情報だけをつかむ

23

直接ストラテジー

③ :言語知識の不足を補う工夫

(コミュニケーション・ストラテジーと重なる)

- 例) ・ 知らない単語の意味を前後の文脈から推測
- ・ 他の単語で言い換え
 - ・ 母語を直訳
 - ・ ジェスチャー



25

間接ストラテジー

① :自分の学習を自分で管理する工夫
(自分を客観視する)

- 例) ・
- ・ 学習が計画通りに進んでいるか確認
 - ・ 自己評価



27

間接ストラテジー

② :感情をコントロールする工夫

- 例) ・ 音楽を聴くなどして不安をなくそうとする
- ・ 「がんばれ」と口に出し、自分を勇気づける
 - ・ 気分転換をしてやる気を出す

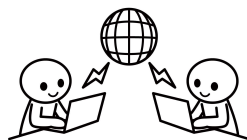


29

間接ストラテジー

③ : 人との交流によって学習を進める方法

- 例) ・ 他の学習者とSNSで情報交換
 ・ 友達を作って話す機会を増やす



(3) 学習理論



31

32

学習観の変化

従来：教師主導型・知識伝達型の学習

近年：活動参加型の学習

重視



2つの理論を基に生まれた

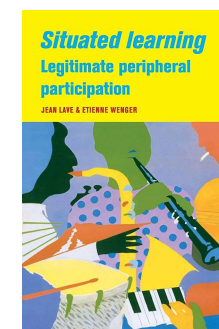
- ・ (by レイヴとヴェンガー)
- ・ (by ヴィゴツキー)

33

『状況に埋め込まれた学習』 (1991) by レイヴ、ヴェンガー

「学習」とは、個人の頭の中で起こるものではない


していくことだ



by Amazon

34

レイヴとヴェンガーは に関心を持った
 仕立て屋で働く新人の職人と共同生活を送り、
を観察




36

学習者はある共同体の中で、 として
 初めは
 周囲の助けを借りながら、 、
になっていく (=)
 ↓
 Legitimate peripheral participation

37


by Wikipedia



レフ・ヴィゴツキー (1896-1934)

- ・人間は、 (社会的相互作用)により、
 自分の していく
- ・「学習」は ものである

↓




40

by ヴィゴツキー

子供や学習者の 能力の領域

① 問題が解決できる領域

② があれば解決できる領域
(=)
 ↓
 The Zone of Proximal Development



41

(4) 言語と文化

42

by シューマン(1978)

- ・ 言語習得 =
- ・ 目標言語の文化に、
という気持ちが強いほど、その言語の習得が進む

43

by ジャイルズ(1982)

話す相手との

によって、話し方や言語を相手に近づけたり遠ざけたりする

※第二言語学習者も、母語話者同士も



44

近づける場合 ()

- ・ 部長が若手社員と距離を縮めたくて、若者言葉を使う
- ・ 幼児に赤ちゃん言葉で話しかける

遠ざける場合 ()

- ・ 怒った時、急に丁寧な言葉遣いになる

45

(5) バイリンガリズム



：（個人が）2言語を使用している状況

：社会的に2言語を使用している状況

：生後から2つの言語を同時に習得

：1つの言語の習得が始まった後、
少し遅れて2つ目の言語を習得

46

47

：2言語を使用
どちらもある程度十分な言語能力がある

：2言語で4技能すべてができる

：2言語を使用するが、
どちらも言語能力が不十分

（敬語とため口、標準語と方言）を

～例～

・両親の母語が異なるバイリンガルの子どもが、

父親とは父親の母語で、母親とは母親の母語で話す

48

49

<言語能力によるバイリンガルの分類>

- : 2言語の能力がほぼ均衡
どちらも流暢に使える人
- : 2言語の能力に差がある人
(一方の言語が優勢で、もう一方が劣勢)
- : 2言語どちらも言語能力が不十分な人
=ダブルリミテッド/セミリンガル

51

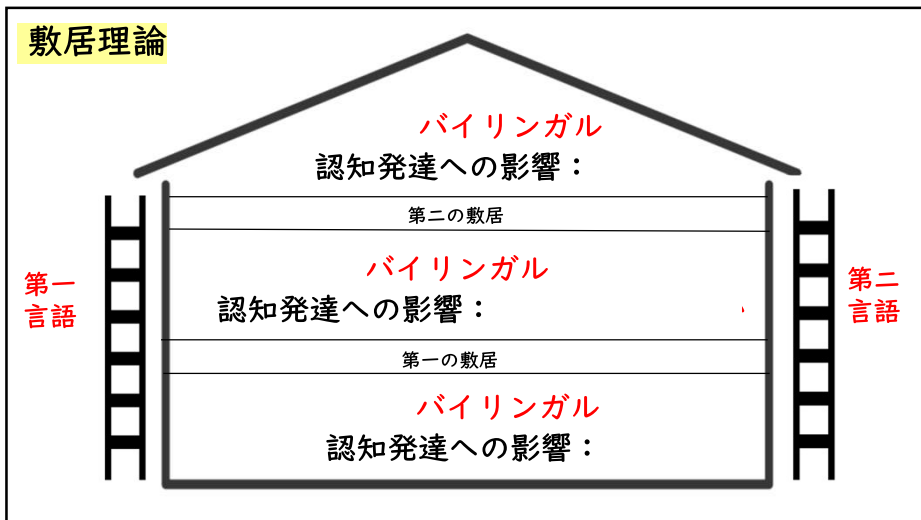
(1976) byカミンス

バイリンガルの子どもについて
の理論

限定バイリンガルの子ども
⇒バイリンガリズムが、認知的な発達に . の影響を与える

均衡バイリンガルの子ども
⇒バイリンガリズムが、認知的な発達に . の影響を与える

52



53

(1979) byカミンス

敷居理論の考えをもとに立てた仮説

子供の第二言語の能力は、

- ・
- ・

ほど、発達しやすい

54

byカミンス

⇒ **日常生活** で必要な言語能力
年で身に付く



⇒ **学習** に必要な言語能力
身に付くまでに 年かかる



55

／ 風船説 ／ SUPモデル

(1979) byカミンス

第一言語と第二言語、



56

／ 冰山説 ／ CUPモデル

(1981) byカミンス

第一言語と第二言語は、

(含まれる)



57

<バイリンガル教育>



59

①

⇒ **言語的に多数派**の生徒が、教科の一部または全部を
少数派の言語で学ぶ

※1965年、**カナダ**の学校で、英語を母語とする子供が
一部の教科を**フランス語**で受けたのが始まり



60

イマージョン教育の分類

●第二言語の使用比率による分類

イマージョン：**すべての教科**を第二言語で行う

イマージョン：**一部の教科のみ**第二言語で行う

61

イマージョン教育の分類

●開始時期による分類

イマージョン：幼稚園の年長組または小1から

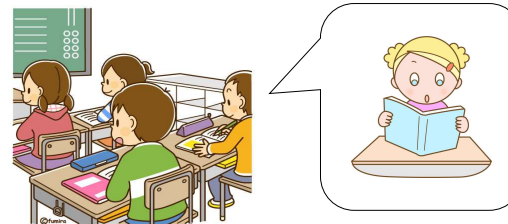
イマージョン：9～10歳くらいから

イマージョン：11～12歳くらいから

62

②

⇒ **言語的に少数派**の生徒が、**多数派の言語**の授業に入る

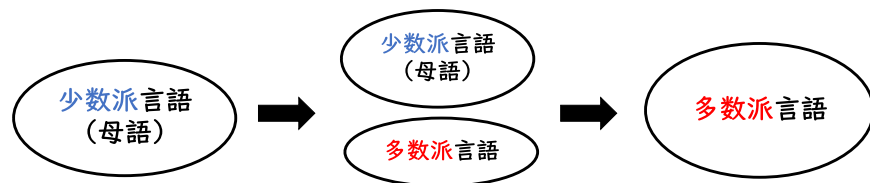


63

12

③

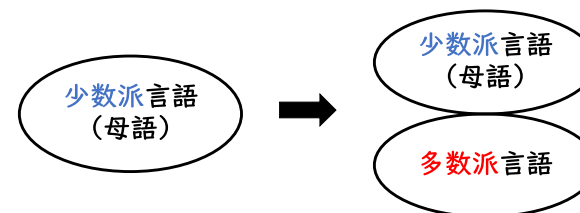
⇒ 家庭で使う**少数派**言語から、
社会的に優勢な**多数派**言語へ**移行**させる



64

④

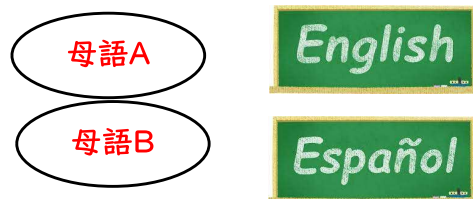
⇒ 家庭で使う**少数派**言語を**維持**しつつ
多数派言語を習得する



65

⑤

- ・ 2つの異なる言語を母語とする生徒がほぼ同数いる学校
- ・ 教科の半分を一方の言語で、もう半分を他方の言語で受ける



66

⇒ 第二言語を習得する過程で…

- ・ **母語**を失う
- ・ 母国に対する**誇り**を失う
- ・ **アイデンティティ**を失う
- ・ **学力低下**



68

13

⇒第二言語を習得しつつ、母語も使い続ける

母語の発達・アイデンティティ・学力が犠牲にならない

新たな価値が加わった状態



69

<年少者への日本語教育の現状>

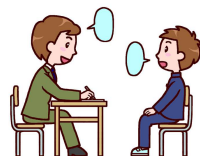


70

<日本語能力評価ツール>

(文部科学省)

⇒日本語能力を把握し、指導方針を決定



※日常会話はできるが、教科の学習が困難な児童が対象

71

<外国人児童への日本語教育>

⇒教室に日本語指導者が入り込んで、
生徒のそばで、授業内容を翻訳・解説



※日本語指導担当教員は、

72

14

⇒国語などの教科の時間（または放課後）に別の教室で日本語の授業を行う

・ として編成・実施

・ 授業時間数は、
（※標準は、週8時間）

・ 在籍学校に日本語指導教員がない場合、近隣の学校の日本語学級に定期的に通う（ ）



74

<小・中学校での日本語指導>

「JSLカリキュラム」（文部科学省）

- ・ を統合的に行う
- ・ 将来的に、 が目的
- ・ に基づいて教科の内容の理解を測る
- ・ 教師が ことができる

77

<小・中学校での日本語指導>

「JSLカリキュラム」の種類

① : 日本語で学習課題についてグループ活動を行う

各教科に を育成

体験（自己体験を話す）⇒探求（他の生徒と一緒に調べる）⇒発信（発表）

② : 各教科の学ぶ力を育成

78